



ヤングケアラーについて

草加市議会議員

井手 大喜



2 ▼ 始まり

16歳の春
何かが変わった

父が背負っていたものに今度は自分も関わることに
対応できるかは別問題

3 ▼ヤングケアラーを取り巻く環境

レアケースとして美談化されていた 2014年ごろ

まだまだ周囲に理解してもらうことは難しく

多くの関心が寄せられ「ヤングケアラー」の
具体的なイメージも定着

4 ▼ 直面したこと

・知識不足

退院したら、また以前の生活に戻れる

何も変わらないはずだった 姉とのこと

脳梗塞？ 認知症？ 介護保険？ 市役所？

知的障がい？ 就労支援？ 成年後見？

5 ▼ 直面したこと

・相談できる相手

「介護」を知っているのは友達の親世代

「自分は一世代ズレたことをやっている」

父親のオムツ、徘徊は友達には言っても仕方ない

20年後に共感の連絡 CMを見た同級生から

6 ▼ 直面したこと

・できないことだらけ

市役所窓口で／サービス事業所で

ケアマネと／サービス利用の際に／施設で

能力が制限される、介護者

相手にされない、介護者

7 ▼ 直面したこと

・ 職業を選べない

学校のキャリアセンターとは縁がなく

いつ終わるかわからない「介護」を抱えて就職はできない

社会に認められていく、同級生とのギャップ

でも今ならば思う

実は就職することも可能だったのではないか

8 ▼ 直面したこと

・別れ

10.20代は人生選択の連続

自分には選べない道もあり、

その判断の度に同世代の友人らとは異なる道へ

9 ▼ヤングケアラーへの支援

- 小中学生であれば

スクールソーシャルワーカーが家庭への支援を

- 高校生以上であれば

ライフステージに合わせたアドバイス

進学OR就職などのキャリア形成の支援

なによりも大人が必要

10 ▼ 支え手を支える

ヤングケアラーも

いつかはヤングケアラーではなくなる

18歳を越えたら、支援が変わるのか

支援の窓口は変わってしまうのか

人生のステージが変わっても継続した支援が可能なように

支え手を支えるという考え方を持つことを最優先にしたい

II ▼ 条例化によって

制度をつくる度に

その制度と他の制度との狭間が生まれてしまう

「見えなくなる存在」

「取り残されてしまう存在」をつくり出してはいけない

12 ▼忘れもの

介護をしたことで

できなかったこともある

介護をしたことで

できたこともある

これも事実として